

自己点検評価（工学部共通学群英語科目）

2013年 8月 31日提出

1. 理念・目的	
1-1. 教育目標1
2. 教員・教員組織	
2-1. 方針（目標）に沿った教員構成，能力・資質等の明確化1
3. 教育内容・方法・成果	
3-1. 学習・教育目標とカリキュラムとの整合性（教育体系の構築）2
3-2. 授業科目と担当教員の整合性3
3-3. シラバスに基づく授業の実施4
3-4. 卒業研究の指導状況4
3-5. 具体的な取組内容と成果（FD/授業改善）4
3-6. 学生支援5

1. 理念・目的

1-1 教育目標

《現状説明》

教育目標は2010年度に整備を行い、公開をしている。共通学群の教育目標は以下のように定めている。「工学部の全ての学生を対象に、高度な専門分野を学ぶために必要な基礎力を養う分野と、専門領域を超えた学際的な分野の教育を展開することを教育の主たる目的にしている。具体的には、数学科目、物理学科目、化学科目（以上数理専門基礎科目）、英語科目、情報系科目、人文社会系科目、体育・健康科目、教職科目といった科目を通して、4年間の学習に必要な基礎力を鍛え、さらに、工学の基礎の上に広い視野と柔軟な思考力・応用力を持って社会に羽ばたく人材の育成を目指している。」

これを受け、英語科目ではその教育目標を次のように定めている。「グローバルに活躍する技術者に必要な英語コミュニケーション能力を備えた人材育成を教育研究の目的としている。確かな基礎力の上に、将来的ニーズや興味に即した英語力、工学研究や実務につながる応用力をつけるために、段階的な科目を開講している。」

《点検・評価》

共通学群および英語科目の教育目標は、2009年度の学群制度の導入を契機に整備されて現在に至っている。現在の教育目標は、工学部の掲げる「豊かな教養を涵養する体系的学習」「他者との共生」という教育方針や社会の要請に十分に沿ったものと認識している。

《将来に向けた発展方策》

共通学群会議および英語科目担当者会議を中心に、学部の教育方針および社会の要請を反映した教育目標の恒常的な見直しを行う。

《根拠資料》

学修の手引2012年度版
2010年度共通学群議事録

2. 教員・教員組織

2-1 方針に沿った教員構成、能力・資質等の明確化

《現状説明》

工学部英語科目の専任教員は教授2名、准教授3名、助教1名の6名から構成されている。工学での博士号取得者が1名、言語学での博士号取得者が1名、言語学での修士号取得者が1名、英語教育学での修士号取得者が3名である。全員が大学院レベルで英語教育を専攻している。2011年度に英語授業を担当している非常勤教員数は31名である。非常勤教員全てが、英語教育・教育学、言語学もしくは英文学で修士号を取得している。また、全員が日本の大学レベルで3年以上の教授経験がある。非常勤講師の採用決定にあたっては、教育研究業績を精査するとともに面接を行い、資格審査委員会を経て、教授会で承認を得ている。加えて、次年度の授業担当を依頼する際に、教育および研究に関する業績書の提出を毎年義務付け、能力や資質を評価している。

《点検評価》

英語授業のカリキュラムおよび内容の決定と授業担当については、専任教員の経歴および業績から判断して、現在の教員構成は適切と思われるが、カリキュラムや授業の評価と改善については、専門の教員の雇用もしくは現在の教員の専門性向上が必要と考えられる。2009年度より大学院での英語科目が開講され、大学院授業担当に資する専任教員の増加が必要であり、改善が求められる。非常勤教員については、教育研究業績書からは、教育能力や資質の把握が難しい場合もあるため、評価を行う別の方策が必要である。専任の学部英語授業の担当コマ数は、半期で6コマから7コマである。専任と非常勤の授業担当割合であるが、2012年度に専任教員が担当した英語授業コマ数は、全体の約30%で、非常勤教員への依存度が高く改善が必要と思われる。

《将来に向けた発展方策》

大学院生への英語教育のニーズに対応するため、2012年度の新規教員雇用や専任教員の学位取得などにより、大学院授業担当ができる専任教員の増加に取り組んでいる。非常勤教員への高い依存度の軽減については、英語専任教員定数の増加をお願いしている。

《根拠資料》

2012年度英語科目会議議事録

3. 教育の内容・方法・成果

3-1 学習・教育目標とカリキュラムの整合性（教育体系の構築）

《現状説明》

共通学群科目の基本方針に従って、英語科目ではグローバルに活躍する技術者に必要な英語コミュニケーション能力を備えた人材育成を教育目標としている。必要とされる基礎力の養成を目的に、1年次対象の基底科目 Listening & Speaking, および Reading & Writing の科目を開講している。基底科目の認定を得た学生が履修する科目として、上達I科目群と上達II科目群を開講している。上達IIは、より高い英語力の学生を対象としており、TOEIC500点以上の英語力を目安としており、シラバスに明記している授業もある。上達Iでは、Speaking & Listening系5科目、Reading & Writing系4科目、英語総合系4科目とTOEIC対策2科目を開講している。上達IIではSpeaking & Listening系3科目、Reading & Writing系4科目、TOEIC対策1科目を開講している。2008年度に専門学科に対して行った英語教育ニーズに関するアンケートおよび聞き取り調査結果に基づいて、2009年度と2010年度にカリキュラム変更を行い、専門科目より要望が多かった Reading スキル向上のため、Reading & Writing 系のコマ数を多く用意している。

現状のカリキュラムでは、1, 2年次で一般的なコンテキストでの Speaking と Listening 力および Writing 力の養成を図っている。工学系コンテキストでの英語力を養う科目としては、「工学英語 I A」「工学英語 I B」と学術論文執筆演習を行う「Writing II」、工学の内容を英語で発表する「Presentation II」があり、主に2年次後半以降を対象とした科目である。Reading の科目と「英語総合」でも工学系の内容を取り入れているが、現状では学生の専門に準拠したものにはなっていない。学生の専門科目における英語ニーズに対応すべく、2011年度より「工学英語 I B」は、専門学群ごとに時間割を編成し、専門に近い内容を柔軟に追加できるように工夫した。その他の英語科目としては、大学院の「Advanced Technical English」が英語科目教員担当授業である。

《点検評価》

現状のカリキュラムでは、1，2年次で一般的なコンテキストでの英語力の養成が中心となっている。教育目標である技術者に必要な英語コミュニケーション能力の養成には、専門科目に準拠した英語科目を1，2年次対象に増やす必要がある。豊洲キャンパスで開講している科目では、英語学力が大きく異なる学生の混在がみられるため、能力にあったクラスで学べるようカリキュラム上での工夫が必要である。また、JABEE 対応カリキュラムを行う専門学科においては、英語科目の必要取得単位数が増え、英語の授業を履修する3年次以上の学生が増えているため、豊洲キャンパスでの上達Ⅰの開講コマ数を増やす必要がある。

《将来に向けた発展方策》

2011年度から開講した2年次対象科目「工学英語ⅠB」では、FD・SD助成プロジェクトで開発した専門カリキュラム対応の教材を副教材として使用している。2012年度では、英語科目教員と専門教員が連携をし、同様の英語教材開発に着手した。また、「工学英語」を学科推奨科目とすること、2008年度に行ったものと同様の専門学科英語ニーズへの調査と、英語授業における専門教員との連携の可能性についても模索中である。学生が自分の学力に見合った授業を選択できるようにクラスのレベルの指標を示せるようなしくみを検討していく。さらに、3年次以上の履修者増加に対応するため、来年度に豊洲キャンパスでの開講数を2コマ増やすことにした。

《根拠資料》

学修の手引2012年度版，59～61頁【英語関連の開講科目】

2010年度・2011年度FD・SD助成報告書

2012年度シラバス（TOEICⅡ）

3-2 授業科目と担当教員の整合性

《現状説明》

Listening および Speaking を中心とする授業科目の担当は、英語の native speaker もしくは near-native の英語能力がある日本人教員が担当している。Reading を中心とする科目は主に日本人の教員が担当しているが、上達科目Ⅱの reading は native speaker が担当している。Writing を中心とする科目は、英語の native speaker もしくは near-native の英語能力がある日本人教員が担当している。TOEIC 対策科目、「工学英語」および基底科目 Listening & Speaking の再履修クラスは全て日本人教員が担当している。専任教員、非常勤講師ともに、経歴、教育および研究業績を基にその適性を判断し、担当授業を決定している。

《点検評価》

担当教員の経歴、教育研究業績から、英語授業科目全般において担当教員は適切であると思われる。現状では基底科目 Reading & Writing のインテンシブクラスは時間割の編成上の制約のため、非常勤が担当しているクラスがあるが、学生へのサポート体制がとりやすい専任教員が担当した方が望ましい。

また、工学系および工学関連の workplace English 授業の開講に向け、担当できる教員（非常勤含む）の雇用および教育が必要である。

《将来に向けた発展方策》

基底科目のインテンシブクラスを専任教員が担当できるように時間割編成の検討を行う。

《根拠資料》

2012年度工学部時間割

2012年度10月英語科目会議議事録

3-3 シラバスに基づく授業の実施

《現状説明》

全ての英語科目でシラバスに基づいた授業を実施している。シラバスは、専任教員が精査し決定をしている。非常勤講師に対しては2月に次年度のシラバスを送付し、4月初めに実施する説明会において、シラバスに基づいた授業実施をお願いしている。

《点検評価》

学生による授業アンケート項目の「この授業は明確な目的と全体計画に沿って行われましたか」に対する評価平均が4以上であることから、シラバスに基づいた英語授業が実施されていると判断している。

《将来に向けた発展方策》

今後もシラバスに基づいた授業の実施を行うとともに、説明会や意見交換会を通じて非常勤講師への理解と徹底を図る。

《根拠資料》

2012年度授業シラバス

2012年度授業アンケート結果

3-4 卒業研究の指導状況

《現状説明》

2012年度は、1名の教員が言語認知分野での卒業研究指導を行った。

《点検評価》

工学的手法を用いた言語、コミュニケーションおよび言語教育研究分野で研究活動を行っている教員が卒業研究指導を行うことが可能であるが、専門学科との卒業研究担当についての調整が必要である。

《根拠資料》

教員・教育・研究業績評価データベース

3-5 具体的な取組内容と成果 (FD/授業改善)

《現状説明》

2011年度から開講の科目「工学英語」のために、専門学群でのカリキュラム内容に即した英語教材の開発を、専門教員と共にFD・SD助成プロジェクトとして行っている。また、各授業の内容や教科書、シラバスの点検を毎年11月に行っている。非常勤講師との勉強会や意見交換を年に1回以上行っているほか、専任教員内で授業内容や教材等に関する情報交換を行い、授業改善を図っている。専任教員を中心に、学内外のFD関連の講演会、セミナー、勉強会に参加をしている。また、統一教科書を用いる授業では、専任教員や非常勤講師が作成した副教材を担当者全員が共有できるようにしている。具体的には、教材のフォルダーやデジタル化した教材を入れたUSB記憶媒体を講師室に置き、また教材や教材に関する情報をメールで授業担当者全員に送付し、授業改善の一助となるようにしている。英語科目のホームページを2011年度に立ち上げ、シラバスと教材の共有をしている。今年度の勉強会では、非常勤講師を交え、授業運営・成績管理の向上を目的にワークショップを開催した。

《点検評価》

上記の活動が示すように、科目内教員のFDに対する意識は高いと思われる。しかし、英語授業コマ数の約70%を非常勤講師が担当しているため、更なる授業改善のためには非常勤講師とともにFD活動を行う機会を増やす必要がある。

《将来に向けた発展方策》

今後も勉強会の実施やFD関連の学会、講習会や研究会等への参加を科目内で促すとともに、非常勤講師に対してもFD関連活動への参加をお願いする。

《根拠資料》

2012年度7月・12月英語科目会議議事録

2010年度・2011年度FD・SD助成申請書および計画書

非常勤講師室設置の英語授業教材フォルダーおよびUSBメモリー

英語科目ホームページ：<http://sit-english.sakura.ne.jp/>

3-6 学生支援

《現状説明》

英語科目では、学生の学修支援のため学習サポート室を設けている。学習サポート室は、月曜から金曜日の14時40分から17時50分まで開いており、2名の特任教員が担当として常駐している。英語科目では専任教員のうち1名を学習サポート室担当とし、必要に応じてミニ講座の開設や支援を行っているほか、学習サポート室指導記録を科目の会議で報告している。学習サポート室特任教員の選定、講座内容や教材選択などは英語科目のカリキュラムに従って専任教員が行っており、必要な備品購入についても英語科目がサポートしている。授業でチラシを全学生に配布し、また学業不振の学生にはRecommendation Sheetを渡すことによって学習サポート室での学修を促している。

加えて、専任教員全てがオフィスアワーを設定しているほか、非常勤講師も含めて全員の教員が授業前後に学生からの質問に応じている。認定の取得を必要とする基底科目については、成績不振と思われ

る学生および出席回数が少ない学生について、所属学科主任を通じて担任に報告を行っている。また、担任や学科の要請を受けて英語科目の教員が学生の面談をする場合もある。

《点検評価》

オフィスアワーや面談、質問の時間を設けるなどの方法に加えて、学習サポート室での学修支援を通じて、学生支援の試みは十分に行われていると思われる。学習サポート室に関しては、学生の利用頻度が後期は低いため、学習サポート室がより利用しやすい時間帯や講座の設定へ改善が必要である。

《将来に向けた発展方策》

学生にとって学習サポート室がより利用しやすい時間帯の設定を試みる。また、学習サポート室での講座内容に学生の希望を反映させる。加えて、英語科目のホームページで、英語学習に役立つ情報（海外研修情報、学内無料 TOEIC IP 実施情報など）を発信できるよう検討をする。

《根拠資料》

2012年度7月英語科目会議議事録

2012年度学習サポート室指導記録